

オハイオ州 フィンドレー大学 奨学生レポート 1月
「新学期」

秋学期が終了し、1月から春学期が始まりました。春学期とはいうものの、まだまだ雪も多く、氷点下が続く毎日です。

今月は、3週目の週末に **Eastern Michigan University** で行われた、日本語教師のためのワークショップに参加してきました。このワークショップは主に、アメリカで日本語教師をされている方たちのために開かれたもので、実際に日本語を学んでいるアメリカ人の生徒・学生の実態や、日本語教育の現場で使える教授法やアクティビティを、実際に体験しながら学ぶことができました。また、現在アメリカの高校や大学で日本語教師をされている方々と交流することもでき、とても良い刺激を受けることができました。どの先生方も日本語に強い思い入れを持っていらっしゃる、日本語教育を盛り上げて行こうという高い志を持っていらっしゃいました。

このワークショップの中で特に印象に残ったことがあります。それは、最近の日本語クラスのアメリカ人学生について話し合った時のことです。最近の学生の特徴として、実際に現場で教えていらっしゃる先生方から出たのは、**instant gratification** (すぐに答えがほしい)、暖簾に腕押し、すぐに写真を撮る、**Passive** (受け身) というもので、日本人の学生にも共通して言えることが数多く出てきました。電子機器の発達により、多くの情報が次から次へといろいろな媒体を通して発信され、何もしなくても多くの情報に触れることができ、その上、ネットを使えばすぐに欲しい答えが見つかり、簡単に記録を残せる、そんな便利な世の中になってきているからこそ、このような学生が増えているのではないかと思いました。このような学生は効率よく短時間で多くのことを学べる一方、自ら考えようという姿勢が低かったり、すぐに答えを求めたりするようになってしまっているのではないかと思います。このような学生の実態をふまえた上で、授業を構成していく力が、日本語教師に限らず、多くの教師に求められているのではないかと思いました。太平洋という広い海をまたいでも、学生の特性や教師に求められることは同じなのだと思います。